

東日本大震災から5年

被災者と心を通わす専大生

東日本大震災から3月11日で5年。原発被害によって故郷を追われた被災者をテーマに論文を書いた学生、被災者と心を通わす支援を続けている専大ゼミ生などの活動を紹介する。

原発避難者の故郷への思いを卒論に

白らの体験と重ねる

池田 和希さん(人間科学4)

「ある日突然、故郷を追われ、帰れなくなった原発避難者のやせない思いを伝えたい」と。東京電力福島第一原子力発電所事故により、生まれ育った町から引き離された池田和希さん(人間科学4)は、故郷をテーマにした卒業論文を仕上げた。400字を超える論文は、家族や地域コミュニティがばらばらになった同郷の人々の声を拾った。指導した大矢根淳人間科学部教授は「記録することによって自分の体験を客観的に見つめることができるようになった証し」と評価する。



▲ 大矢根教授と論文について話す池田さん



▶ 雑草に囲まれた自宅(池田さん撮影)

池田さんは福島県富岡町の生まれ。震災当時、曾祖母、祖父、父母、妹の4世代7人家族だった。3・11のその日、池田さんは通学していた磐城桜が丘の教室の一番前、携帯電話から警報音が鳴り響き、体験したことを思い出す。避難先で友人の家族の車に同乗した。午後2時40分過ぎ、携帯電話から警報音が鳴り響き、体験したことを思い出す。避難先で友人の家族の車に同乗した。午後2時40分過ぎ、携帯電話から警報音が鳴り響き、体験したことを思い出す。

どの大きな揺れに数度襲われた。「ドアを開けて」という声ではうろうろして教室のドアを開けた記憶がある。友達の家族の車に同乗し、その日のうちに帰宅。家族全員無事だったが、消防団員の父が「原発が危ない」という情報を聞いてきた。しかし、真の状況は分からない。翌日、町の防災無線で避難指示を聞いた。福島県内の避難所を転々とした震災から3日目。避難所に新聞やテレビが届いた。そこで衝撃の写真や映像が目に見え込んだ。東北・太平洋沿岸を襲った大津波「福島第一原発で水素爆発……」。

震災前人口1万6千の富岡町は、福島第一原発から南へ約12キロ。自宅は帰還困難区域に指定された。地震の起きた時間ですべてが止まっている。現在、池田さんの家族の生活拠点は郡山市。富岡町に帰宅できる見通しは立たない。専大人間科学部社会学科に入学した池田さんは、2年次の社会調査実習で宮城県仙台市、仙台市など他県の被災地を訪ね、災害社会学の知識を身につけたいと大矢根ゼミに入った。「震災直後は恐怖と不安で押しつぶされそうになった。故郷に帰れないという現実を受け入れることがどうしてもできなかった」と池田さん。「ようやく現実と向き合

えるようになり、震災にどうする民俗学者・柳田國男の「風景論」に着目。訪ねた人たちはいづれも望郷の思いを抱いており、「夜ノ森の桜」(弘前海岸)などを記憶にとどめようと、富岡町に近い福島県内に生活拠点をしていた。卒論は本論171ページに付録273ページの膨大な内容。2年間にわたって撮影した写真130葉が全編を彩り、フォトエッセイもある。進入禁止の柵や看板、道路脇に置かれた廃棄物が入った大きな袋。伸び放題の雑草に囲まれた自宅……。人けのない町の様子から目に見える放射能の脅威が写し出された。「8人が明かしてくれた胸のうちを一致して『帰りたいけれど帰れない』やるせない

とす民俗学者・柳田國男の「風景論」に着目。訪ねた人たちはいづれも望郷の思いを抱いており、「夜ノ森の桜」(弘前海岸)などを記憶にとどめようと、富岡町に近い福島県内に生活拠点をしていた。卒論は本論171ページに付録273ページの膨大な内容。2年間にわたって撮影した写真130葉が全編を彩り、フォトエッセイもある。進入禁止の柵や看板、道路脇に置かれた廃棄物が入った大きな袋。伸び放題の雑草に囲まれた自宅……。人けのない町の様子から目に見える放射能の脅威が写し出された。「8人が明かしてくれた胸のうちを一致して『帰りたいけれど帰れない』やるせない

「西島さんありがとう」 石巻専大で「しのぶ会」



池田さんは中学の社会科の教師を目指している。いつの日か教え子にこの体験を伝えたいと考えている。

災害関連の卒論展示

大矢根ゼミ

災害社会学を専門に長期的被災地研究に取り組む人間科学部社会学科・大矢根淳ゼミの卒業論文



展示会が1月13日から18日までサテライトキャンパスで開かれた。写真は、展示会が4年次生の集大成を一般にも公開しようとする東日本大震災翌年の2012年に始まり、今年で5回目。論文のテーマは東日本大震災や阪神・淡路大震災など災害に関するもの、さらにフェアトレードや貧困、社会関係資本などで、力作13点が並んだ。各論文に共通しているのは、

足を使って現地調査し、インタビューを主体に行っていることだ。池野優香さんは、福島県浪江町の「希望の牧場・ふくしま」を訪ねた。福島第一原発事故で20年圏内の被ばく牛を国から言い渡された殺処分に従わず生かし、事故の「証人」として調査を続ける同牧場のボランティア代表に聞き取りをした。テーマを最初考えていた「ペットロス」から方向転換して論文にしたという。金丸隆史さんは、生田キャンパス近くの宿河原地区の合同防災訓練をは

じめとする町会活動に密着した。「防災の基本は、住民同士が顔の分かる関係を持つこと」とまとめた。展示は、卒論全文のほか、要旨、論文構成図など執筆者の写真とともにパネルにして掲げ、概要が分かりやすく見られるよう工夫されている。「3年次生も加わり、4年次生の論文作成の作業過程を学び次年度に備える方式を取っている」(大矢根教授)という。また阪神・淡路大震災の被災地で20年にわたり定点撮影した写真約1200点の展示や、1、2年次生の演習実習授業の成果報告も紹介され、来場者の目を引いた。

仮設団地で「ふれあい」

人文・ジャーナリズム学科生

文学部人文・ジャーナリズム学科の藤森研ゼミなどの学生たちは、石巻市の被災者ための仮設住宅で傾聴ボランティア活動を行い、11回に達した。おじいちゃん、おばあちゃんたちとお茶を飲み、子どもたちと遊ぶ小さな活動だが、被災者の憩いの場になっている。第1回は震災の年の2011年12月。「若い学生たちと話ができないだろうか」と藤森教授が石巻市の避難所で行った被災者から依頼されたのがきっかけ。「ふれあいプロジェクト」を名付け、同学科の有志学生9人が参加。東京から夜行バスとレンタカーを乗り継ぎ、石巻専大近くの石巻市の仮設開成第11団地(現在の会場は第10団地)集会所に到着すると、子どもからお年寄りまで十数人が待っていた。みんなでおしゃべりをしてゲームを楽しむ。会場に笑顔が広がった。

以来、藤森ゼミ生を中心に年2回のペースで実施、参加した学生は延べ150人を超える。こんなこともあった。ふれあい活動に初めて参

加したご夫婦が女子学生と話すうち、不意に津波被災当時のつらい出来事を、腰を切ったように話した。他人に話したのは初めてだという。

「ふれあいプロジェクト」を名付け、同学科の有志学生9人が参加。東京から夜行バスとレンタカーを乗り継ぎ、石巻専大近くの石巻市の仮設開成第11団地(現在の会場は第10団地)集会所に到着すると、子どもからお年寄りまで十数人が待っていた。みんなでおしゃべりをしてゲームを楽しむ。会場に笑顔が広がった。

「ふれあいプロジェクト」を名付け、同学科の有志学生9人が参加。東京から夜行バスとレンタカーを乗り継ぎ、石巻専大近くの石巻市の仮設開成第11団地(現在の会場は第10団地)集会所に到着すると、子どもからお年寄りまで十数人が待っていた。みんなでおしゃべりをしてゲームを楽しむ。会場に笑顔が広がった。